

秋季大会発表要旨

特集

問い直す〈愛国〉

【特集の趣旨】

運営委員会

(5)

近年、〈愛国〉の言説が活性化している。もちろん、これまでも〈愛国〉は語られ続けてきたが、〈愛国〉を掲げる大量の書籍が書店に並び、ヘイトスピーチが横行する現在の状況は、かつてのナシヨナリズムのあり方とはまた異なる段階を迎えているようにも思われる。震災以降、顕著になったこの傾向は、関東大震災から戦時期日本の状況にも重ねられるように見えるが、注意したいのは、これまで〈愛国〉の運動のなかでは中心化されることのなかった若年層や、女性たちの台頭である。震災後の喪失感を埋めるようにあらわ

れた新しい〈愛国〉のかたちは、現政権の進める解釈変更を含む改憲への動きと重なり合いつながりながら、〈戦後日本〉を大きく塗り替えようとしている。

こうした今日的〈愛国〉のあり方に、文学研究はどのように向き合うことができるだろうか。本企画では、これまでの研究成果を踏まえつつ、日清・日露戦争期以降に生じた〈愛国〉の言説を改めて検証するとともに、いま、ここを問い直すことを試みる。

たとえばそこで女性(あるいは女性の表象)はどのように位置づけられているのか。今日の女性の〈愛国〉運動は、これまでの「愛国婦人会」などのような女性の動員、女性イメージの利用とは、どのように切断／接続しているのか。

また戦後日本文壇では、多くの〈在日〉作

家が、日本と自身のルーツとなる国家との狭間にある困難を描いてきた。歴史認識をめぐる議論が紛糾し、排除の言説が激烈化する現在、〈在日〉にとつての〈愛国〉とはどのようなものとしてあるのだろうか。

さらに、〈愛国〉を問い直す場が、広島であることの意味も大きいだろう。広島を舞台に戦争や原爆の悲惨さを伝えてきた『はだしのゲン』(中沢啓治)が、〈反日〉の自虐的作品として閉架措置をとられたという事例も記憶に新しい。日本のあり方を厳しく問い続けてきた広島は、今日的な〈愛国〉の虚飾を暴く力を持つだろう。

日本の知識人たちにとっての「国家」

小 熊 英 二

人間にとって「国家」とは何か。図式的に言えば、普遍世界・国家・中間共同体・個人の相互関係をどう捉えるかによって、「国家」のあり方が決まる。

西洋近代思想は、国家と中間共同体の機能不全から生まれた。中世秩序の崩壊、内戦の連続、資本主義化と農業人口急減などが、大きな社会解体をもたらしたからである。

その状態に対応するため、西洋近代思想では、普遍世界の創造者である神が定めた自然法が重視された。人間は、神が創造した不変の nature（本能／自然）にもとづき、従来

近代日本は、西洋ほどには社会解体や内戦状態を経験しなかった。そのため近代日本の知識人は、中間共同体の機能不全の感覚が薄く、以下のような思考パターンをとる者が多かった。

中間共同体である「村」や「家」は、揺るぎない「法」を強制する、「自然」な存在である。その束縛から逃れたいという心情が、「個人」という概念を構築する。この「個人」は、「法」を否定したい心情から発しているため、秩序や連帯を構成する能力を最初から欠いている。彼ら／彼女らは、連帯の契機を求めて、国家や「市民社会」、あるいは「民衆」「国際連帯」などに希望を託すが、それは中間共同体からの脱却願望が現象したものにならない。そのため国家や「市民社会」にも秩序があることが認識されると、幻滅して「家」や「日常」に回帰する。

本講演では、このような思考パターンの各種バリエーションを概説する。しかし日本においても、中間共同体の機能不全が広まりつつあるいま、こうしたパターンにとどまることはできない。それを抜け出す契機を探ることも、この講演の目的となるだろう。

〈愛国〉と対抗記念碑

—— 溶解するレイシズム

山 崎 正 純

すでに知られているとおり、日本の非軍事化はGHQによる初期占領政策によって推進される過程で、植民地・占領地の解放という次元に凍結された。すなわち、敗戦後の領土はポツダム宣言によって決定された既定性として与えられたのであって、日本帝国主義の脱植民地化そのものを、非軍事化と切り離された独自の課題として受け取る機会を逸失した。占領政策の転換後も、冷戦下に置かれた経済大国日本の役割の追求が、脱植民地化という未済の課題に向き合う条件を奪った。

現在日本国内に蔓延する〈愛国〉言説の背景には、帝国意識の亡霊を抱きしめた特殊な社会的構造がある。グローバル化する日常生活にフローする多様なモノ、ヒト、情報はそうした社会構造に対して、未済の過去の完了と終焉を確信させる現象として認知される。平和憲法と戦争回避の七〇年に及ぶ既成事実

が、帝国意識の亡霊を跋扈させる温床になっている。

社会システム論が明らかにしたように、資本主義がグローバルに遍在する今日、このシステム社会に外部は存在しない。資本主義システムは、どのような揺らぎをも利潤に転換する差異のアルゴリズムを駆使する社会である。日本の現代に跋扈する帝国意識の亡霊も、このシステムとの共謀関係にあるかぎり、抹消不可能であろう。

以上のような状況にあって、〈愛国〉言説の内なる偏見と差別とを問い直すためには、この種の言説と社会システムとの共謀関係を脱臼させる仕掛けが必要である。ジェイムス・ヤング、テッサ・モーリス・スズキが主張する「対抗記念碑」、「対抗記念日」の設立の意義は、内部からのレイシズムの破砕可能性にある。文学がこうした社会的コミットメントへの隘路をどう切り結ぶのか、原爆、在日等のイシューをめぐる文学的言説を検討しその可能性について考えてみたい。

愛国的無関心とジェンダー

内藤 千珠子

格差社会を背景とした不満と不寛容が渦巻く現代の日本語空間においては、攻撃的な暴力が極右的ナショナリズムと化し、「愛国」は、もはや社会的メンタリテイのベースとなっているとさえ言えるだろう。

極右化した暴力性は、「韓国」「中国」「在日」「女」といった記号をその対象としているが、そもそもそれは、「誰でもいい誰か」を対象とした暴力から転じたものである。論理的に考えるなら、格差社会をもたらした本来の「敵」や権力は別に存在するはずなのにもかかわらず、攻撃はそこに向かわない。攻撃対象として選ばれるのは、社会的に他者化された存在である。すなわち、極右化する論理、愛国のメンタリテイには、マイノリティがマイノリティを攻撃する構図が含まれている。

本発表では、極右的な愛国のメンタリテイの根底に、他者への無関心と無知、任意の他者に向けられた攻撃的な暴力とが並行してい

る点に注目し、現代小説の細部に書き込まれた無関心の構造をジェンダー論的な観点から分析することを通じて、「愛国」言説の背理について考察を試みたい。ヘイトスピーチに代表される排他的な言説が、論理として破綻していることの原因にはもちろん、歴史認識の欠如、現状認識の欠如があるだろう。しかしながら、従来の学術的枠組に準拠して批判するだけでは、生産的な議論を組み立てるための条件が不足しているように思われる。なぜなら、愛国の背理とは、権力に抵抗する論理が無効となった地平で構成されたものだからである。格差社会がもたらす閉塞感やコンプレックスが暴力の対象を求めるという方向性と、他者や外部に対する無関心のベクトルとが両輪となって形成された、愛国の背理について議論するためには、極右的な感性が標準化され、平凡な枠組として受容される次元を可視化し、理解した上で、批評の地平を構築することが必要だと考えている。

秋季大会研究発表

第一会場 (B155教室)

個人発表

紅葉と清方の『金色夜叉』

— J・E・ミレイ「オフィーリア」を軸として

原田 のぞみ

本発表では、ラファエル前派のJ・E・ミレイ「オフィーリア」を軸として、尾崎紅葉『金色夜叉』のテキストと、鏗木清方「金色夜叉」の描写が、どのような関係を結んでいるかについて論じることを目的とする。

紅葉『金色夜叉』の寛一は、台詞・独白にハムレットの台詞“To be, or not to be, that is the question”のパロディと考えられる部分がいっつか挙げられ、ハムレットを思わせる人物造形がされているという。それに対し

て、宮の人物造形をオフィーリアに求めることもできるとされる。また紅葉は、百合、ウォルター・クレイン「ネプチューンの馬」など、ラファエル前派風のイメージによって寛一の「暁の夢」における宮の水死を構成したといわれている。そこから、同じくラファエル前派のミレイ「オフィーリア」を意識して、宮の水死を描写した可能性も浮かび上がると思われる。さらに紅葉は、清方が描いた宮の水死の下絵に批評を加えたり、芸者の写真を使って清方に宮の容貌のイメージを伝えたりしており、小説家と画家の間に一種の共同作業があったという見方が成り立つ。

清方は、紅葉の内意もあり、春陽堂刊『金色夜叉』の口絵として絵画「金色夜叉」を制作した。また、紅葉の死後に、『金色夜叉』の名場面を集めた「金色夜叉絵巻」も編んだ。清方が描いた「金色夜叉」は、ミレイ「オフィーリア」をモチーフとして、水死する宮を表現したといわれている。しかし、清方が描いた宮の水死のポーズ（「金色夜叉」と、宮がベッドに伏せるポーズ（「金色夜叉絵巻」）を比較すると、清方がミレイ「オフィーリア」への関心だけではなく、紅葉『金色夜叉』テクス

トへの忠実な読解をもって、宮の水死を描写したことが推察できる。さらに、清方「金色夜叉」の背景に描かれた躑躅や山藤から、清方は「続金色夜叉」と「続続金色夜叉」にまたがる寛一の暁の夢の構造を深く理解した上で、「金色夜叉」「金色夜叉絵巻」を描いていたことも窺える。

『虞美人草』の「作者」

— 藤尾の死の再検討 —

西田 将哉

本発表では、まず、漱石の新聞連載小説第一作である『虞美人草』を東京朝日新聞入社直前に書かれた『野分』との連続の中に置き直す。この頃の漱石は方法上の模索期にあつたと考えられるからだ。その方法上の模索は、語り手の登場人物に対する敬称付けとして表れる。『野分』の語り手は、「作者」を自称し、登場人物に「君」や「さん」などの敬称を付けるのだが、このことは『虞美人草』の語り手にも共通しているのである。

この語り手の特徴は、藤尾の死を考える際に有効である。これまでの『虞美人草』研究は、藤尾の死の空白を埋めるためのものだったと言っても過言ではない。十八章と十九章の間（新聞連載で言えば百二十四回と百二十五回の間）で藤尾は死ぬ。しかし、藤尾がなぜ死んだのかは語られていないのである。つまり、藤尾の死因は隠されているのだ。

この空白が、藤尾は作者漱石の「女性嫌悪」や、甲野の「家の論理」や、「美文」で描かれることによって殺されたというように、藤尾の死が様々な意味づけをされる要因になっているのだが、様々な意味づけをされることは、かえって藤尾の死をあいまいなままにしてしまおうだろう。

このあいまいな死を再検討するために、「作者」を自称し、登場人物に「君」や「さん」という敬称を付ける『虞美人草』の語り手に着目する。語り手の好悪の感情の表出についてはすでに指摘があるが、登場人物に敬称を付けるということが、語り手の登場人物に対する好悪の具体的な表れなのではないかと考えられる。さらに、登場人物への敬称付けから明らかになる語り手の好悪から、語り手と

登場人物が、互いの情報不足を補完し合う関係があまり出される。それは、語り手「作者」の語り手、甲野や宗近の言動が補完するような関係である。藤尾を死に至らしめる要因をこの相互補完的關係に求め、『虞美人草』の新たな解釈の提示を目指す。

岩野泡鳴の理論と実作

——『断橋』の「附録」に見られる改稿から

王 憶 雲

岩野泡鳴の代表作に、〈五部作〉と呼ばれる作品群がある。この〈五部作〉の成立過程は複雑である。複数回出版されたこともあり、各本文に相違が見られ、書誌学的な問題が存在している。泡鳴は、自らの予期できぬ急逝までに、新潮社から『泡鳴五部作叢書』を順次刊行した。第五篇としての『毒薬女』が未刊行に終わっているが、自らの小説論（一元描写論）を体現した工夫を施した新しい本文を世に送り出している。

『泡鳴五部作叢書』の第二『断橋』（大正八年九月）には、「附録」が付されている。この「附録」は「お鳥の苦しみ」、「お鈴の家」、「氷峰の断片」、「勇の家庭」という表題の短篇からなっている。「勇の家庭」以外は、「附録」所収のものを含めて、本文が三つも存在している。本文の生成過程を次のようにまとめることができる。まず、独立した短篇小説として発表されたもの（A）がある。それから長篇小説の一部にあたるもの（B）がある。最後に叢書の附録に収録されたもの（C）がある。

本発表はまず、BとCの本文を比較することによって、特に問題視されてこなかった「附録」と泡鳴の〈一元描写論〉との関わりを明らかにする。次に、AとBの本文を照合することを通して、人物造形に力を注いだ泡鳴の姿を検討する。最後に、泡鳴が理論にこだわったことが、小説の実作に及ぼした影響を考えてみたい。

島崎藤村と南米移民

——国民作家とディアスポラの〈接触〉

岡 英里奈

本発表では、一九三六年における島崎藤村と南米移民との出会いと交流を、国民作家とディアスポラとの〈接触〉という観点から考察する。

長編『夜明け前』の完結後、日本ペン倶楽部初代会長に就任した藤村は、一九三六年九月にブエノスアイレスで開催された国際ペン大会に出席するために、妻静子と有島生馬とともに同年七月に神戸を立ち、ブラジル、そして開催地アルゼンチンに約一ヶ月間滞在した。現地での活動や藤村自身の抱いた感想は、紀行『巡礼』（岩波書店、一九四〇年二月）によって知ることができるが、さらに作家藤村を現地の日系移民たちがどう受け入れたのかについては、『伯刺西爾時報』や『日伯新聞』、『亜尔然丁時報』といった現地日本語新聞に報道された記事から読み取ることが出来る。現地移民たちの歓迎ぶりは熱烈で、「祖国」

日本の国民作家としての藤村は、連日その発言が報道されるばかりでなく、当時の現地移民たちが抱える二世の日本語教育問題などにも関わることになるのである。一方、藤村もまた、日本政府によって現地の移民の実情調査を依頼されており、帰郷後には外務省亜米利加局内移民問題研究会において講演を行っている。さらに、そのような国民作家としての活動に並行して、藤村は南米から北米、ヨーロッパに渡るこの旅を「巡礼」の旅として位置付け、岡倉天心などを含めた文学的テーマとしての〈移民〉や〈交通・移動〉についての思索を深めていくのである。

そこで本発表では、こうした藤村の思想的営為とも大きく関わる南米移民たちと藤村との〈接触〉——両者の相互作用の在り方を、『巡礼』の記述や現地の新聞記事などの分析を通して明らかにする。それによって、ペン倶楽部に代表されるような国際主義と日本主義が複雑に絡み合った立場と、南米移民たちの立場、そして一文学者としての藤村の立場とが、どのような協力や衝突を孕みながら関わり合うのかについて、考察を深めたい。

パネル発表

女性作家たちの〈原爆・原発〉表象

——広島・長崎・福島

遠藤郁子・谷口幸代・与那覇恵子
(ディスカッサント) 赤坂憲雄

二〇一一年三月二一日の東日本大震災以後、文学に何ができるのかという問い掛けが様々になされてきた。第二次世界大戦によって原子爆弾の脅威を身をもって体験した日本は、戦後、原子力を「平和利用」してゆくことで、その経験を克服しようとしてきた。しかし、スリーマイル島やチェルノブイリの原子力発電所事故の後に起こった東日本大震災での福島原子力発電所の爆発事故は、多くの書き手に〈世界の終わり〉を幻視させた。

いち早く『原発と原爆——「核」の戦後精神史』を書き上げた川村湊は、『震災・原発文学論』において「日本の現代小説家たちは、そうした『世界の終わり』をいやおうなく目撃せざるをえなかったのであり、それを描く



(11)

ことよって、『世界の終わり』以降の世界の始まりを書き始めなければならなかった」と指摘し、林京子の発言を引用しながら、国民全員がヒバクシャとなった今、『過去の体験が何も生かされていなかったという絶望感』と、『何も学習されていなかった』という『空しさ』を超えて、私たちはヒバクの体験を、全世界の人々と、未来に生まれてくる人類とに伝えなければならない。それが、林京子たちヒバクシャの文学に学んだ私たちの文学の使命なのである」と述べている。文学の研究者にもその「使命」は求められているといえるだろう。

以上のような問題意識から、このパネルでは、とくに福島、広島、長崎での〈被爆／被曝〉を表現した作品を取り上げ、赤坂憲雄の提唱する「将来に向けて」「禍々しい災厄の記憶を、やがて希望への種子へと転換させる」(『震災考』)可能性を問う。

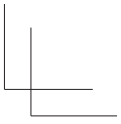
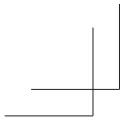
遠藤郁子は、栗原貞子『黒い卵』、正田篠枝『さんげ』などの、広島での被爆体験を詠った〈原爆短歌〉を踏まえつつ、東日本大震災以後に福島原発事故について詠った〈原発短歌〉を取り上げる。とくに、原発事故後、仙

台から石垣島へ移住した俄万智の「子を連れて西へ西へと逃げてゆく愚かな母と言うならば言え」(『あれから』)と、福島県いわき市に留まり続けている高木桂子の「ママいいよばくこのままでいいと吾子は言ふなり本当にいいか」(『青雨記』)という対照的な歌には、原発言説のねじれとそれに翻弄される現在の問題系が色濃く投影されている。生命の尊厳を脅かす放射能汚染に対する強い懸念と、その中で生きてゆかねばならない困難な現状に対し、女性作家たちはどのように格闘を試みているのか、その様相を明らかにする。広島、長崎、福島の経験において短歌はどのような場であった／あるのか。そして今後、どのような場であり得るのか。〈原爆短歌〉と〈原発短歌〉の往還の中に、過去の記憶と現在をつなぐ可能性について考察する。

谷口幸代は、原爆投下後の広島に学徒動員された経験を原点とする大庭みな子の文学を取り上げる。大庭文学は『浦島草』を頂点に戦争や原爆の記憶を語り継ぐ文学として読み継がれてきたが、今回のパネルでは、こうした戦争・原爆の文学という読み方を越えて、大庭文学が3・11後を生きる私たちにもたら

すものを探ってみよう。大庭は、原爆とは人間の欲望が作り出したものであり、自らの欲望によって人間は殺されたのだという認識を根幹に置いて創作を続けた。近代の科学技術による生命の破壊に鋭く警鐘を鳴らした大庭の言説を、原子力の「平和利用」のスローガンのもとに原発の開発が進められてきた歴史の経緯の中で捉え直す時期が来ている。このような問題意識に基づき、『浦島草』で冷子から夏生、そして雪枝へと女性たちが語り継ぐ広島への記憶から現代の読者が共有し得る痛みについて検討を試みる。

与那覇恵子は、長崎で被爆した林京子の、まず原爆症の恐怖を抱えて生きざるを得ない『祭りの場』や『長い時間かけた人間の経験』などに作品に登場する女性たちに焦点をあてる。子供を産みたいと思いつつも遺伝の問題を考え断念する女性。産んでも子供の発症に脅えて暮らす女性。林作品に繰り返し表現される「死」とともに生きている女性の生は、放射能が生命を否定する要素であることを明らかにする。それは「自然」をも巻き込んだ「生命の否定」として捉えられている。林の文学的営為はこの「生命の破壊」に対する強



い危惧の表明である。広島、長崎、福島を経験を経てなお「生命の破壊」の方向へ流されつつあるかに見える現状において、私たちは文学を通じて何を共有し「希望への種子」としていけるだろうか。福島原発後の作品『再びルイへ』を入りに、津島佑子、小林エリからの小説にも触れつつ考える。

パネルの後半は、デイスカッサントに〈福島の問題〉に多様なかたちで関わっている民俗学者の赤坂憲雄氏を迎えて、異なる角度からこの問題についての視点を加えていた。だき、議論を広げてゆきたい。

第二会場 (B159教室)

個人発表

谷崎潤一郎「肉塊」における水族館／人魚幻想と映画

佐藤 未央子

映画を主題に据えた小説や評論を発表するに留まらず、大正活映株式会社の脚本家として映画製作にも携わった谷崎潤一郎は、日本近代において最も早く映画にコミットした作家である。映画監督吉之助と、女優グラン・ドレンの映画製作を描く「肉塊」(大一一二)に表出した映画理論や撮影技法は、谷崎自身の映画体験を基にしていると見られ、先行研究においても谷崎の映画観あるいは大衆文化観を示唆すると読まれてきた。しかしこれだけでは、作品の批評的射程を捉えたことにはなるまい。本発表は新たに、「肉塊」における映画と、水族館／人魚幻想の表象を連関的に考察し、吉之助が没頭した映画が、作中で

いかなる文脈を形成しているか読み解く。

吉之助は映画館と水族館を結びつけ、水族館の幻想とそこに棲む人魚の物語を映画に撮ろうと試みた。本発表では、映画館と水族館における鑑賞システムの共通項を取り出しながら、作中映画「人魚」の機能を考察する。

両者は共に視覚的な幻想空間を提供する場であるのみならず、水族館における人魚と鑑賞者との隔絶は、映画の鑑賞システムの換喩であると考えられる。水族館幻想、人魚との恋愛を主題とした映画「人魚」は映画の在り方に関するメタテクスト的機能を持ち、さらに「肉塊」のプロットをも方向付けると論じる。

グラン・ドレンに感嘆した吉之助は「高級」映画の製作に挫折し、グラン・ドレンのブルー・フィルムを製作する。これは被写体と監督／鑑賞者の隔絶を克服しただけでなく、映画の根源的な〈見世物〉的性質を暴き出す試みであるとして、積極的意義を見出したい。

「肉塊」では、大枠のプロットにおいても、作中映画のレベルにおいても、グラン・ドレン＝人魚を映画的存在として主題化していたと言えよう。映画表現の可能性と限界性を人魚という存在に集約させ、作中映画の挿入に

よって重層的に物語化した本作を分析することは、文学史／映画史においても意義深いと考える。

プロキノ映画『土地』とシナリオ『土地物語』における映画と文学の協働関係

雨宮 幸明

一九二九年にプロレタリア文学運動を母体にナツプ（全日本無産者芸術家連盟）の所属団体として誕生したプロキノ（日本プロレタリア映画同盟）は独自の記録映画を制作し戦前における日本の社会矛盾を糾弾した。官憲の弾圧によってプロキノは一九三四年に組織的な映画製作を停止し解散するが、その映画製作は現代において日本のドキュメンタリー映画史の源流として認識されている。

本発表はプロキノの現存映画作品のなかで、当時の大きな社会問題であった農村小作争議に取材した映画『土地』（監督：高周吉、一九三一年制作）と、その監督である高周吉

によって書かれたシナリオ『土地物語』（「ナツプ」一九三二年七月）の分析を中心に、プロキノの映画制作とシナリオとの関係性を考察するものである。「映画運動の基礎を工場・農村に置く」としたプロキノの活動理論に連携して制作された映画『土地』は、一九二七年より一九三五年まで約八年間に渡り闘争が継続された富山県の大沢野村小作争議を背景としている。しかし大沢野村での現地取材の後にプロキノによって制作された映画『土地』は、

完成後に執拗な官憲による映画検閲を受け、現存する内容は前半部が消失したものとなっている。本発表ではシナリオ『土地物語』との比較照合によって失われた映画の前半部をシナリオによって補完し、また、モデルとなった大沢野村小作争議の実際の争議経過を参照しつつ、プロキノが制作した映画『土地』の全体像とシナリオとの協働関係を検証する。本発表によって従来の研究では十分に検証されてこなかったプロキノの映画制作におけるシナリオの役割と、地方問題をも取材の対象とした広範な活動実態や小作争議という当時の社会問題を映像化したプロキノの社会的な映画制作の意義をより具体的に解明したい。

織田作之助「清楚」をめぐる

—— 初出版と単行本版の差異と映画化の問題 ——

柳井 貴士

織田作之助の「清楚」は、一九四四年、川島雄三監督により映画化された『還つて来た男』の原作とされる。松竹大船撮影所企画部関係者と川島から、「私の「清楚」といふ新聞小説（大阪新聞に連載した）を映画化する計画がある」（『四つの都』の起案より脱稿まで）、「映画評論」一九四四年四月）との打診を受け、織田は「木の都」（『新潮』一九四四年三月）と「清楚」を合せる形でシナリオを書き上げている。「清楚」は、『織田作之助文藝事典』では初出不明とされていたが、『大阪の小説家と映画』（関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一三年三月）において、『大阪新聞』昭和一八年五月一日から二九日連載との指摘をうけた。昭和一八年の出版状況は厳しく、単行本出版が順調だった織田も、この年を最後に戦時中は出版がで

きなくなる。織田は、単行本『清楚』(輝文館、一九四三年九月)の「あとがき」に、「上梓するに当つて、新聞連載の原稿をもとに、殆んど全項にわたつて新しく書き直した」と記している。そのため「清楚」に関しては初出版の確認が必要となる。

本発表では、『大阪新聞』連載の初出「清楚」を点検することから始める。挿絵と初出テキスト、単行本版との差異をふまえ織田が小説をどのように「書く」のか、その姿勢を分析する。そのために、これまで織田が受けた検閲の問題もふまえ、時局に合わせながら、その時代性を逸脱させるテキストとしての「清楚」評価を試みる。また映画原作としての側面も手がかりとして「清楚」を考える。映画原作となった翌年の時点で、事後的に織田がどう「清楚」を捉えたのか分析する。映画についての織田の言及と、作品に反映された過剰な「偶然」性を対象に、それ以後の織田の文学観との関連の考察を行いたい。

生の帰属、領有、組み替えをめぐる物語

——太宰治「魚服記」論

追田好章

本発表は、太宰治の小説「魚服記」(『海豹』、一九三三年三月)において、小説の言葉の歴史的文脈を復元することで、自らの生を自問するスワの生と言葉とが、同時代状況といかなる関わりを結ぶのか、そして、彼女の身が鮎へと転じたということが、作中で反復される水中への転落と変身という主題系においていかなる意味をもちうるのかについて、検討しようとするものである。

「魚服記」の語り手がスワに焦点化して語るのは、彼女の生が「ふつうの地図」による地理的把握から排除されながらも、「都」の学生に象徴されるように、鉄道の敷設を前提とする帝国学知としての植物学の多大な欲望を喚起する場で営まれているということである。また、同時代の帝国主義的状况と密接に関わる一九三〇年代における青森県の製炭業とい

うモチーフが、スワと父の生を語る上であえて導入されているという点に鑑みても、「魚服記」の考察において、同時代状況、より具体的には、帝国主義的状况の過程と小説の言葉との関連性を検討することには意義があると思われる。以上の点を手がかりとし、地政学的に再読を試みることで、「魚服記」という小説が、帝国主義的伸長が孕む領有と排除の動態に密接に関与する生を描出している点を明らかにする。

その上で、これまでも重要な主題として論じられてきた、源義経、植物学の学生、父が語る蛇体変身の物語に表れる水中への落下と変身が、スワの滝壺への落下、鮎への変容といかに関わるのかについて検討する。存在すべきでない場所に存在し続けるという点での通底性をもつ彼らの物語と、それに憧れながらも、身を投じた滝壺において鮎へと身を移されるスワの物語との関係性を、いかに捉えることができるのか。本発表では、領有に晒された生を物語る言葉の帰属の揺らぎ、自らの生の事実を組み替えてゆくことの可能性を提示する物語として、「魚服記」という小説を捉えうる可能性を提示する。

パネル発表

盲目の〈視覚性〉

——日本近代文学と盲目

秋吉大輔・金城琴乃・野田康文
(デイスカッサント) 西 成彦

(15)

古代から現代に至るまでの日本の文学において「障害者」は様々な形で描かれてきた。その中でも「視覚障害者」は圧倒的に多く取り上げられてきたと言えるだろう。しかし彼らは、表象される対象であっただけではない。盲者は、自らの共同体から離脱し寺院などに寄宿する漂泊の民となる中で、呪術者の性格を身につけ小集団を形成していった。そして、土俗神をまつるための経文・呪文や、敗者・勝者のための祝言としての歴史物語を紡いでいくとともに、歌謡や雑芸を行ったのである。琵琶法師による『平家物語』を考えるならば、盲者の語りが日本の文芸全体においてどれほど重要な役割を担っていたかは論をまたない。一方で、近代化において視覚障害者は、囲

い込まれ、呪術的な技能を持った異能の小集団から分断されて生きていくことを余儀なくされる。彼らは、日本の近代文学の中においては、「純粹」「神秘」「予言者」「無能力」「不気味」といったステレオタイプ化した盲者のイメージで表象され修辭化されていくのである。そこでは、晴眼者の「光」と対比して、盲者の世界は「闇」として描き出されていく。盲者は晴眼者との対比の中で周辺化され、晴眼者のカウンターとして機能し、その対比の中で初めて表象されていると言っている。しかし、この二項対立は果たして自明なことなのだろうか。「光」と「闇」という表象は、視覚優位の近代において、晴眼者を中心とした作家／読者群によって構成され、視覚障害者の感覚の差異を抹消することによって成り立っている。それは、多様な社会的・身体的な〈視覚性〉から、一つの視覚のあり方を本質化し自然なものとして位置づける「視の制度」(ハル・フォスター編『視覚論』、樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、二〇〇七年四月)によって構成されているのである。視覚障害者は、近代において囲い込まれ分断された生

を余儀なくされるとともに、均一の「闇」として表象されたのである。ここでは視覚障害者の「感覚」の多様性は掬い取れていない。例えば、視覚障害者の中でも、「先天盲」と「中途失明者」では、感覚や世界の認識の枠組に大きな差異がある。その点で、谷崎潤一郎の『春琴抄』は、中途失明の感覚が描かれている点で興味深い。中途失明者にとっての「盲」の世界は「闇」ではなく、「見えない」というだけであり、そこには視覚障害者の〈視覚性〉があるのである(野田康文「谷崎潤一郎と盲者の〈視覚性〉——視覚論としての『春琴抄』——」『国語と国文学』二〇一一年二月)。そのうえ、晴眼者を中心とした盲者の表象は、文学研究そのものによっても更に、強化されていると言えるだろう。ここでは、盲者は均一化した外的な他者として神話化され、ステレオタイプ化したイメージとしてしか分析されていない。視覚優位と言われる近代において、盲者の描かれ方や文学研究での扱われ方は、盲者の〈視覚性〉を描くリアリズムにすら達していないと言えるだろう。盲者の視覚こそ、「晴眼者」にとつて盲点なのだ。晴眼者の「視の制度」は、盲者の視覚を不可

視化することで、われわれの身体や欲望・性欲、関係性を規定しているのではないか。本パネルでは、日本近代文学や演劇などに描かれる盲目の感覚や〈視覚性〉を掘り起こす作業を通して、近代の「視の制度」を改めて問い直す作業を行いたい。

報告では、野田康文が、谷崎潤一郎や内田百閒（「柳檢校の小閑」など）を中心に、明治から昭和初期の近代化における「視の制度」を明らかにする予定である。また秋吉大輔は、俊徳丸伝説の系譜（謡曲・人形浄瑠璃・説教節から折口信夫「身毒丸」、三島由紀夫「弱法師」、寺山修司・岸田理生「身毒丸」、近藤ようこの漫画など）を追いながら、盲者の〈視覚性〉の描かれ方を問いなおすことで、近代から現代にかけての「視の制度」の変遷を辿る。そして、金城琴乃は、現代作家である松浦理英子「親指Pの修業時代」を中心に、盲者の〈視覚性〉を考察する中で、視覚を中心にして性欲や欲望がどのように構造化されているのかについての報告を行う予定である。

デイスカッサントは、比較文学者の西成彦が行う。西は『ラフカディオ・ハーンの耳』（岩波書店、一九九三年二月）などの著作で、左

目を中途失明したラフカディオ・ハーンの耳の感覚を通して、「耳なし芳一」の物語や怪談話など、近代日本が捨て去った物語の調べにある豊かな感覚を掘り起こす作業をしている。盲目の〈視覚性〉については、「盲者と文芸／ハーンからアルトールへ」（『国文学解』）と教材の研究『二〇〇四年一〇月』という論考があり、アルトールが翻案したハーンの怪談に、晴眼者中心による言語表現ではない盲者の言語表現のあり方を見出している。本発表でも、様々な視点で各発表者の報告に対するコメントや介入を行う予定である。

第三会場（B157教室）

個人発表

ハンセン病療養所機関誌と虚子門
俳誌

西村峰龍

ハンセン病患者と非ハンセン病作家の交流は北條民雄と川端康成との関係が人口に膾炙しているが、ハンセン病患者と非ハンセン病作家との交流はそれだけでなく、阿部知二や椎名麟三がハンセン病療養所機関誌『山櫻』『愛生』『高原』で選評や講演をおこなっている。機関誌には療養者が数多くの文学作品を投稿し、その中でも、短詩型の投稿者（詩・俳句・短歌）が最も多く、歌人明石海人や俳人村越化石など優れた作家を生み出した。昭和一〇年には高浜虚子がハンセン病療養所多磨全生園を訪問し、講演をおこない、療養者で俳人の山本暁雨の講演に対する謝辞が『ホトトギス』に掲載されている。当時、療養者の

中には『ホトトギス』に投稿するものも多く、「光明俳人」と呼ばれていた。また、療養者の俳句を指導した虚子門の俳人の一人に大阪府在住の医師本田一杉（本名本田善良）がいる。本田は「俳句救癪」を掲げてハンセン病療養所での講演や療養所機関誌で選評を行った。本田は近郊の長島愛生園・邑久光明園（岡山県）だけでなく、松丘保養園（青森県）多磨全生園（東京都）にも講演に出かけ、積極的にそれらの療養所機関誌の選評を引き受けていた。また、本田は主宰する俳誌『鳴野』を昭和一二年に一般に公開するがここでは、公開の目的として初学俳句の研究指導・ハンセン病療養所の俳人指導の二点を挙げている。『鳴野』公開の際には虚子は題字と祝辞をよせている。そこでは、「全国療養所の俳人の爲に盡くすといふことは誠に結構なことだ。」と述べられており、本田と虚子の交流が密接であり、両者のあいだで「俳句救癪」が意識されていたことがうかがえる。

本発表は虚子がハンセン病療養所全生園を訪問した昭和一〇年から「俳句救癪」を掲げて活動した虚子の弟子本田一杉が亡くなる昭和二四年までのハンセン病療養所機関誌と虚

子門俳誌のつながりを検討することで「俳句救癪」の実態を明らかにする。

精神分析の介入

——木々高太郎『網膜脈視症』論

中原 雅 人

木々高太郎（本名：林謙）は、『網膜脈視症』（『新青年』昭和九／一一）で探偵小説家としてデビューした。同作は精神科医の大大池先生を探偵役とし、動物恐怖や火の幻——その実態は網膜に走っている血管なのだが——が見えるといった神経症の症状に悩む子供の分析を進めていく中で、父親をめぐる過去の殺人事件が明るみに出るという筋書きをもつ。早くから精神分析の知識が応用された探偵小説として評価されてきたもの（江戸川乱歩『日本短編小説傑作集』序文、昭和一〇／九）、いまだその典拠や方法、水準などについて詳細に検証されていない。時あたかもフロイトの和訳版全集がアルスと春陽堂から刊行された頃にあたり、高太郎は林謙としてその翻

訳者の一人に名を連ねていた。したがって小説家が多く解説書を通して間接に知識を得ていた大正期とは異なって、フロイトの著作が直に参照されていることは疑いない。そこでまず作中に現われる分析概念がいかに利用されているかをフロイト原典と対照しつつ検証することで、昭和初期における精神分析受容の一実態を明らかにする。それは作中に「エディプス観念群」のみならず、「原情景」^{ウルス・エーネ}「リビド経済」といった専門性の高い語彙まで用いられていることから察せられるように、紋切り型のフロイト解釈には収まらないだろう。さらに注目されるのは『網膜脈視症』の後半、登場人物の一人が「オットー・ランク」に擬されることだ。このフロイトと決別した、当時も今も知名度の低い分析家をあえて引き合いに出していることに留意するならば、大大池の立場は正統フロイト主義からいくぶん距離をもった地点によって再読されねばならないだろう。それによって、分析家が被分析者の過去の外傷体験を知ることによって現在起りつつある事件へ積極に介入していくという物語の展開に、西欧精神分析学史から裏づけを与えることを試みる。

動員する文学／動員される文学

——満蒙開拓青少年義勇軍にまつわる言説をめぐって

魏 晨

文学は時代の影響を受けるため、その時代の特徴が文学から読み取れる。一方で、文学は時代に影響を与えるという側面もある。文学は社会にどのように影響を与えたのか。言い換えると、文学がどんな社会的機能をどのように果たすのか。この問題を問うにあたって、植民地時代という特殊な時代の出来事——満蒙開拓青少年義勇軍の送出に目を向けようと思う。満蒙開拓青少年義勇軍（以下義勇軍と略す）とは、一九三八年から終戦まで、日本内地の数え年十五歳から十九歳の青少年を「満洲国」に開拓民として送出した制度のことである。貧困に苦しむ成人移民と異なり、義勇軍は主に成績良好な高等小学校卒業者によって構成され、「満洲」に何らかの夢を見て大陸へ赴いていった。その「満洲」の夢は一体どのようなもので、どのようにつくりだ

され、少年たちの頭に植え付けられたのか。こういった疑問を解くために、「満洲」および義勇軍にまつわる言説に焦点を当てなければならぬ。

本報告は義勇軍（先遣隊・饒河少年隊も含む）を描く童話作品（福田清人『日輪兵舎』など）、詩歌（巽聖歌『日輪兵舎の朝』など）、報告文学（『土と戦ふ』など）といった多ジャンルの作品を取り上げ、そのジャンルの特徴を考慮しながら、作品中の「満洲」表象と義勇軍像を分析する。また、満洲移住協会の移民宣伝雑誌『拓け満蒙』（のち『新満洲』）として『開拓』と改題）における「小学生欄」のうち「子供新満洲」そして「小学生新満洲」と改題）の考察を通して、満洲移住協会はどのような戦略を取り、子供の頭に「満洲」の夢を植え付け、子供を満洲移民のシステムに巻き込んだのか、について検証する。そこで、文学の多義性ゆえに、その解釈や受容は移民送出の戦略から逸脱する現象も生じてしまうことも無視できない。最後に、文学によって作られた「満洲」の夢と、その子供の受容とあわせて、義勇軍送出における文学の位置づけを明らかにする。

パネル発表

世界内戦と現代文学

——創作と批評の交錯——

柳瀬善治・岡和田晃
仁木 稔・樺山三英
(コメンテーター) 押野武志

本パネルは、「世界内戦と現代文学」と題し、「世界内戦」の問題が現代の批評と創作の双方の現場でどのように考察また表象されているのかを議論していく。「世界内戦」とは、カー・シュミットの著作に由来する用語で、「内戦」＝「組織化された単位内部の武装闘争」(『政治的なものの概念』)が全世界化したものと定義されるが、笠井潔は「世界内戦」をベンヤミンの神的暴力——「自然状態＝戦争状態の始原的暴力」(『例外社会』)と接続したうえで、二〇世紀以降を世界のあらゆる地点で「始原的暴力」が恒常化した状況としてとらえ、文化・社会領域全般の問題へと拡張した。

湾岸戦争以降の様々な「戦争」のありかたが、九〇年代以降の日本文学においてどのように表象がなされてきたかについては、すでに文芸評論家の陣野俊史の一連の検討（『戦争へ、文学へ』）があり、また、夭折したSF作家伊藤計劃と彼の死後に若きSF作家によって描かれた様々な「世界内戦」についても、岡和田晃が『世界内戦』とわずかな希望で詳細に分析を行っている。

この「世界内戦」という問いの重要性は柳瀬善治も三島由紀夫研究の中で提起してきたが、二〇一四年現在、この問いはより批評の現場でも創作の現場でもリアルなものとして浮上してきたと言える。

まず、柳瀬善治が自身の三島研究および原爆文学研究をふまえ、「三島以後」の文学状況を概観しながら、問題提起と理論的整理を行う。具体的に述べれば、それは「世界を徹底的にフラット化していく高度情報化社会と高度資本主義下での小説の（不）可能性」の問題が「世界内戦」の表象とどのように接続するのか、そして、現代文学は（核がもたらす）人間の認識能力を超えた巨大な時間、および放射能や薬物テロといった「表象不可

能な」題材を、どのように表象しうるのかという問題である。これらの問題を「世界内戦」を主題とした作品がどのように処理しているのかを検討する。

SF評論家である岡和田晃は、自著の議論を受け、伊藤計劃の仕事と彼と問いを共有する書き手に焦点を当てて報告を行う。それは、柳瀬の報告とも共通するが、グローバリゼーションとネオリベリズムに席捲された二十一世紀において、いかにして文学のアクチュアリティを確保できるのかという切実な問題の共有といつてよい。伊藤は、それに加え、激変する情報環境および生政治の変容についてのヴィジョンを作品内で明確に提示し、世界で多発するテロや紛争と現代の離人症的な精神性を結びつけ、現在の世界の相「世界内戦」に応答するための方法を提示してみせた作家である。この伊藤の問いを共有する二人の書き手、批評的なアプローチを導入することで世界文学をラディカルに問いなおす樺山三英と、東洋史学とラテンアメリカ文学の蓄積を縦横に用い、認知科学や文化人類学などの知見も取り込んで未来史構築を行なう仁木稔、彼らの作品がいかなるパースペ

クテイヴに置かれているのかを長谷敏司、岡田剛、八杉将司といった作家の仕事とも絡めて問い直す。

仁木稔は、『グアルディア』から一貫して、「時代を経ても変わらない人間性、暴力や愚行を為す人間の心性の根源」を描いてきたが、本報告では、SFの持つ「ユートピア（ディストピア）表象」の機能、つまり「現実を（振れをはらんで）映し出す」機能に着目し、それをより根源的な人間の本質の投影にまで拡張する可能性を探る。それは、「世界で暴力、愚行がなぜ行われるのか」という根源的な原因を探るため、いいかえれば恒常化した「始原的暴力」をどのように表象しうるのかを問うためである。

樺山三英は、九〇年代以降の日本文学が扱ってきた「世界内戦」の主題を中心に報告する。具体的にはSFや伝奇小説、架空戦記といったジャンルフィクションと主流文学の技法が結合した例として、『石の来歴』『五分後の世界』『あ・じゃ・ばん』『戦争の法』『インディヴィジュアル・プロジェクト』『ねじまき鳥クロニクル』といった作品を扱う。そこでこれらの作品が、歴史改変の問題を

扱っているのと同時に、「世界内戦」を表象することが語り手の自己意識の分裂（それは「世界内戦」を記述する「私」とは何かという人称への問いをも誘発する）を呼び寄せることに着目する。さらに九〇年代の問いを継承したものとしてゼロ年代前半の「セカイ系」的想像力を位置づけ、そこから自身の作品も含むゼロ年代後半の「世界内戦」を描いた作品への系譜をたどる。

最終的に浮かび上がるのは、「いつ果てることもない悲惨、それはある種平衡状態であり、クライマックスもカタルシスもない」（仁木稔『ミカイルの階梯』）「世界内戦」の中で、「生き延びていく個のありよう」（樺山）「わずかな希望」（岡和田）とは何かという問いである。

全体へのコメントは押野武志が担当する。

第四会場（B251教室）

個人発表

サラリーマン〈庶民〉表象の形成について

——源氏鶏太初期サラリーマン小説に見る高度経済成長前夜のサラリーマン像——

坂 堅 太

一九五一年、源氏鶏太が第二五回直木賞を受賞した際、選評委員であった大佛次郎は「源氏鶏太君の手柄は、何と言つてもサラリーマンの世界を、小説界に押出したことである」という評を残している。源氏本人もサラリーマン小説の先駆者であると自認する発言を残しているが、実際にはそれ以前、特に一九二〇年代から三〇年代にかけては、浅原六朗の「サラリーマン物」や佐々木邦のユーモア小説など、サラリーマンを主人公とした小説が登場していた。それらの小説に描かれ

ていたのは、マルクス主義とモダニズムとの間で苦悩する「蒼白きインテリ」や、日常生活からは遊離した「逸民」としてのサラリーマン像だった。では、源氏の作品が描いたとされる「サラリーマンの世界」は、浅原や佐々木の小説に描かれたものとのような点が異なっていたのか。また、源氏の作品こそが「サラリーマンの世界」を捉えたものであるとして位置付けられた背景には、いかなる力学が働いていたのか。ここで注目したいのが、源氏の初期作品は当時「庶民文学」という言葉で形容されていた、ということである。源氏のサラリーマン小説は何故「庶民」という形象と結び付けられたのか。「蒼白きインテリ」「逸民」から「庶民」へという変化を可能にしたものは何であったのか。こうした問題群を考察することは、戦前の「中間」階級から戦後の「中流」階級へとというサラリーマン形象の変貌を考える上で不可欠な作業であろう。

以上の問題意識の下、本発表では一九三〇年代―五〇年代のサラリーマン小説を比較分析しながら、その変容の過程を跡付けていく。高度経済成長を通じ、日本社会の典型的自画像の一つとして定着していったサラリーマン

という表象がどのような文脈で成立したかを明らかにすることが、本報告の目的である。

花田清輝「原子時代の芸術」論

——アヴァンギャルド芸術はどう原水爆を描くか——

板倉大貴

(21)

本発表では、花田清輝「原子時代の芸術」(『世界文化年鑑・1955』平凡社、一九五五年三月、原題:「原子力問題に対決する二〇世紀芸術」)を扱う。「原子時代の芸術」について、これを主要な考察対象として扱った論考は少なく、言及されるとすれば、原民喜や大田洋子の作品を花田がアヴァンギャルド的視点から「記録」として評価していること、芸術的な不足を指摘していることに焦点をあて、考察したものがほとんどである。しかし「原子時代の芸術」は花田の『アヴァンギャルド芸術』に見られる方法論を用いて原水爆の問題に対決した著作であり、考察されるべき意義のある論考だと思われる。

一九五四・五五年は、五四年三月に起きた第五福竜丸の事件を受けて、核兵器廃絶の署名運動が原水爆禁止日本協議会に発展する時期であり、それと同時に、高度経済成長を目前に控え、原子力の平和利用が叫ばれる矛盾を抱えた時代であった。小田切秀雄は「原子力問題と文学」(『改造』一九五四年十二月)

において、原爆に関する文学の「多方面」的進展、原子力の「平和的」利用の「すばらしい可能性」に言及し、羽仁五郎は「原子力の問題」(『思想』一九五四年六月)において、原子力の利用を人間の倫理の問題に還元した。本発表では、このような同時代言説と「原子時代の芸術」を比較し、「原子時代の芸術」の独自の意義を解明する。この時に論点となるのは、原子力利用のオプティミズムと原爆体験のニヒリズムとの関係構築の仕方であり、それと関連した(「原子時代の芸術」において主張されている)「典型化」と同時代的な肯定性の問題である。

右の作業において花田の言説の特質を確認したうえで、それが芸術作品としてどのような具体的な結果となり得るのかを「原子時代の芸術」において花田も言及しているロール

ジェの『原子時代』、武田泰淳の『第一のボタン』、ピカソの「ゲルニカ」との接続において明らかにする。

大江健三郎における「悲劇」の位相

——『個人的な体験』『人生の親戚』をめぐって

南 徹 貞

大江健三郎は、「虚構世界」としての小説作品のなかで「現実世界」の隠蔽された悲劇的なものを巧みに表現してきた。彼は、「悲劇の表現者」(一九七二)という題のエッセイで、芸術における「悲劇」の再定義を行うことよって「今日なお生きている悲劇とは、あらためてなにか?」という問いかけをおこなっている。本発表の目的は、大江の作家としての大きな転換期に書かれた二つの作品『個人的な体験』(一九六四)と『人生の親戚』(一九八九)を比較することによって、作家の実体験を交えながら現代社会の「悲劇」を

見詰める作家の眼差しが、どのように表現され変容してきたのかを明らかにすることである。

今から五〇年前に発表された『個人的な体験』は「障害児との共生」という小説のテーマが最初に現れた作品であり、読者は、小説のタイトルや結末の内容から作家の「私小説」あるいは感動的な「自伝的小説」として読み進めるかもしれない。しかし、新しく生まれてきた赤ん坊が得体のしれない「怪物」として表現されており、主人公の反復される「嘔吐」のイメージはグロテスクな雰囲気を出している。このような、「私小説」的な手法を用いた「障害児との共生」という主題性が「悲劇的なもの」のイメージと結びつけられる作品に『人生の親戚』がある。一九七〇年代を背景としたこの小説は、大江が女性を主人公にした最初の小説であり、「障害児の自殺」をめぐる諸問題や宗教的なモチーフを扱っている点で注目される。

文学の普遍的テーマのひとつである「悲劇」が、大江の思想的な背景のなかでどのように表現されたのか、その主題を表現するために「私小説」的な方法が用いられた理由について

て検討する。「悲劇」に抗する姿勢を示しながらも、その「悲劇」が孕む暴力性を通して、この二つの小説が発信するメッセージ性について考える。

狂気と動物

——武田泰淳『富士』における国家批判

村上克尚

一九六〇年代末から七〇年代前半にかけて、「狂気」は人々の関心を喚起するトピックスの一つだった。その大きな要因には、大学闘争に象徴される若者たちの反逆の機運が挙げられるだろう。これらの運動は、国家や社会が定める「正常さ」の権威を問いに付し、「狂気」として囲い込まれたものの中に可能性を見ることが促した。

文学の場でも、これらの機運への呼応が見られた。例えば、六九年七月の『文藝』では、秋山駿、大江健三郎、川村二郎、野間宏によって、「文学と『狂気』」の座談会が組まれた。また、この時期には、なだいなだ、北杜夫、

加賀乙彦らの精神科医出身の作家の活躍も立った。七一年には、精神病の当事者としての体験を描いた、小林美代子の『髪の花』が芥川賞を受賞している。

武田泰淳の『富士』（『海』六九・一〇、七一・八）もまた、この時期に、戦時中の精神病院を舞台として描かれた小説である。従来『富士』に関しては、正常／狂気の二項対立の踏み越えという主題が指摘されてきた。そして、この主題は、泰淳の『司馬遷』以来の多中心性の概念によって説明されてきたのである。

このような読み方は、他方で『富士』における時代性の刻印を軽視してしまう危険もある。本発表では、佐藤泉らの近年の研究を参照しつつ、『富士』を同時代の文脈と合わせ読むことを目指す。特に、ライシャワー刺傷事件を受けた精神衛生法改正の動き、保安処分の問題、いわゆる反精神医療派の改革運動などは重要な参照項になり得るだろう。以上を確認した後、本発表では、『富士』の最も重要な思想を、「人間」中心主義的に編成された社会の中で排除されてしまう存在として、あえて精神病患者と動物とを重ねた上で、

どのようにすれば、そのような諸存在と倫理的関係を結ぶことが可能になるのかを問おうとしている点に指摘したいと思う。

第五会場 (B255教室)

個人発表

庄野潤三の「家庭小説」
ホームドラマ

谷川 充 美

戦後文学における家族や家庭の問題を考えると、テレビという新しいメディアの登場は見逃せない。その中でも、ホームドラマというジャンルは、時に現実から乖離し、時に現実に寄り添いながら、家族のマイイメージ形成に大きく関与してきた。日本のホームドラマは、「七人の孫」「肝っ玉かあさん」などの家庭の日常茶飯事を扱うアットホームな作風に始まり、「岸辺のアルバム」のような家族相互の他者性や機能不全など戦後家族の揺らぎと歪みを扱うシリアスドラマへと展開し

ていく。ところが、現実の家族や社会状況に影響されながら変遷していくホームドラマと相反するように、庄野潤三は《丘の上の家》で暮らす家族の「家庭」のドラマへと傾斜していく。

その後の庄野は、かつて彼を特徴づけた日常における「危機」や「不安」はなりを潜め、「子供」を中心とした穏やかな家庭の光景を扱った多くの「家庭小説」を生み出していく。家族を動揺させる要因を小説世界から退け、

一刻と変貌していく家族イメージから一線を画すかのようなそれらの作品は、現実社会に対するアンチテーゼとも捉えられるが、先行研究では《負のエネルギーを限りなく無に近づけようとしてゆくかのような登場人物たちの、ひいては作家の意思》を看取する好意的な理解こそあるものの、批判的あるいは積極的に評価しようとする動きはほとんどない。そのことは、江藤淳による「治者の文学」という理解と文学史上の位置付けを定説化し、新たな理解や解釈を妨げる要因ともなっている。

本発表では、庄野潤三の『夕べの雲』以後の家庭小説から『野鴨』『明夫と良二』を取

り上げ、従来の庄野潤三の家庭小説に対する理解と認識を再検討していく。同時に、その文学活動をホームドラマの変遷と照らし合わせることで、『夕べの雲』以後の庄野潤三の文学史上の位置づけについても考えてみたい。

大庭みな子『浦島草』における記憶と語り

上戸 理 恵

大庭みな子『浦島草』(講談社、一九七七年)は、記憶の中に浮かび上がる姿と目の前にある現実の姿との齟齬をくり返し描いたテクストである。記憶が不定形かつ動態的なものであるということは、この小説の冒頭から繰り返されているモチーフだが、「ヒロシマ」という場の記憶と結びつけられたときにこのモチーフはさらなる切実さを持つこととなる。一九四五年八月のヒロシマの記憶が一九七〇年代に呼び起こされるときに、原爆の当事者と非当事者とはともにある困難に直面する。ここで問題になるのが、記憶の曖昧さ

である。記憶を保持することの困難、記憶を他者に伝達することの困難、過去の記憶を現在に結びつけることの困難は、この小説の通底音となっている。

本発表の目的は、『浦島草』における原爆の語りと記憶をめぐる困難とがどのように関連しているのかを検討し、新たな『浦島草』読解の視角を示すことである。本作において原爆の記憶といかに対峙するかという問題は、当事者の「語り」を含めた言語による応酬と結びつけられている。原爆がどういふものかを伝える言葉は「実際を超えることはない」という限界を持っており、原爆投下後の広島状況を目撃したヒロイン^{りょうこ}冷子の語りは自らその限界を露呈させる。代わりに前景化しているのは、語りのパフォーマンクス性である。原爆という出来事を、自身の姑との確執や自閉症である息子・黎との因果関係で捉えようとする冷子の語りは、他の人物に「作り話」「妄想」として位置づけられている。しかしその一方で、冷子の語りの細部のリアリティは非当事者にも引き継がれる強度を持つている。

本発表では、以上の視角から「人間の理解

をはるかに超えた体験」である原爆に対峙したときに「言葉」がどのような限界と可能性を持ち得るのかを考察する。小説に織り込まれた時空間の多層性を分析し、複数の作中人物たちの語りがどのような力学の中で作用しているのかを検討する。

村上春樹の小説作品における恋愛 表象の傾向と若者向け雑誌による 恋愛の「マニユアル化」の相関関 係について

徳 江 剛

村上春樹の小説は、初期作品から最新作『女のいない男たち』に至るまで、しばしば恋愛を中心にファクターとして扱い、性が媒介する関係性の力学を描き続けてきた。村上の小説を恋愛の側面から分析していく上でまず問題となるのが、村上の小説において描かれる恋愛に特定の傾向が見受けられることである。ここでは女性は男性ジェンダーの語りによって性的なタームで表象され、また恋愛は

性的な関係に短絡的に発展し、そして女性は男性に対して性的に奉仕する義務を負っている一方、男性はその義務を負っていない。

このような傾向は何を反映したものなのだろうか。このことを考える上で手がかりとなるのが、同時代の雑誌メディア——特に若者向け雑誌群である。日本においては一九六〇年代に誕生した若者向け雑誌は、高度経済成長に伴う消費文化の成熟に伴って広く普及し、性の「マニユアル化」に寄与してきたメディアである。それゆえ、当時の若者の間で共有されていた恋愛観を把握するための資料として適当といえよう。また、デビュー直後の村上が若者世代の間で受け容れられ、人気作家としての地位を獲得していった背景には、「平凡パンチ」や「宝島」といった若者向け雑誌において村上が取り上げられていたという経緯がある。さらに、村上自身若者向け雑誌に度々寄稿していることから、村上と若者向け雑誌の近接性がうかがえる。村上は、雑誌メディアが牽引していった若者文化の中で恋愛が様式化されていく最中、まさにその現場に居合わせていた作家といえるのである。本発表では、村上の小説に現れる恋

愛の傾向を明らかにした上で、小説内における表象と同時代の若者向け雑誌によって形成されていた言説との比較を行い、両者間の影響関係を明らかにすることを旨とする。

「マチ」の声を聴く

—— 崎山多美と「沖繩」の記憶 ——

渕 上 千香子

本発表では、崎山多美の二〇〇六年以降における「マチ」をモチーフとした中短編を読み解きながら、どのように崎山が物語化された「沖繩」の記憶から消去された声を描き出すかとすることを考察する。特に「クジャ奇想曲変奏」(二〇〇八年)における、本土から来たカメラマンである「オレ」が、戦後のコザを想起させるような「マチ」と出会い、「マチ」の人々と関わる過程に着目する。「クジャ奇想曲変奏」では、「オレ」が行動を起こすその前に、「マチ」の人々である血縁集団、シンカヌチャーが「オレ」に呼びかけてくる。「オレ」はシンカヌチャーのある「儀

式」に遭遇し、彼らの自らの記憶を語る「内面告白」を聴くこととなる。この「マチ」の人々の「内面告白」には、多様な立場の声を描き出されている。通常、多様な立場の声を描き出そうとしても、「その立場の声」として平板化したものとなってしまふ。しかし「加害者の語り」といった単一的に見える語りに、崎山は複数の声を描き出していくのである。「オレ」はこの「マチ」の声を聴き、「マチ」の声を獲得する展開となるが、「オレ」がどのように「マチ」の声と関わっていくのかを考察する。

「オレ」を「マチ」の記憶に関わるよう巻き込む「マチ」の声は、「オレ」だけでなく読者をも巻き込んでいく。「マチ」の記憶に「集団自決」の教科書記述をめぐる問題といった現実の問題との接続を仄めかし、崎山は「マチ」の声を聴き届けるよう、読者が持つ物語化された「沖繩」の記憶を求め、訴えかける。その手法によって崎山はいったん物語の崩壊を試み、物語の中では結ぶことのない他者との関係を浮かび上がらせようとする。このように読者が見落としてきたものに対し目を向けさせ、物語化された記憶を問

いなおさせるような崎山の試みを、彼女の同時代の作品と関わらせながら捉えたい。